

り候。はや見取り候に付て人通の絶え間を見合ひ、一刀に切すて罷り通り候由なり。

中野左之助隅田川にて男立切り候事 左之助小船に乗り納涼に出られ候に、男立乗り込み様々無作法を盡し、船場にて手水つかひ候處を見すまし、首を落され候。首は川に落ち申し候。人の見付けぬ様に、手早く骸には物をかぶせ申され候。左候て船頭に申され候は「此の事沙汰仕るべからず、隅田川の上に漕登せ、死骸を埋めくれ候へ、金子を澤山にとらせ申すべく。」と申され候に付て、右のごとく仕り候。鴻に埋め候處を、船頭的首切落し、直に歸られ、世上に何の沙汰も無之候由。

此の時左之助船に、陰間若衆一人乗せ置き申し候。男立を切り候時、左之助申し候は、「其方も男なり、若輩にて切習ひたるがよし。」と申し候に付、死骸を一刀切り申し候。夫故後日口外相成らず候由。

千住善右衛門討果し候事 綱茂公御在江戸御式臺、御使、御供等相勤め候人の内、西二右衛門、深江六左衛門、納富九郎左衛門、石井源左衛門などは若手の器量者、其内二右衛門馬藝名人の名を取り候。不斷衣裝鏡を立て、木馬にて身形を吟味し、小袖はかまの仕立様まで好み、江戸に隠もなく、馬

乗袴と申す事は二右衛門より始り申し候。其の頃男達と申す事有之候。二右衛門事は屋敷男だての内にて候。幾人ともなく辻切をも仕り候。二右衛門、六左衛門は大身に候へ共、部屋住故従者五六人にて相勤め候。善右衛門は馬上にて罷越し候。初て登り無案内にて、奉公のたち兼ね取違ひ可相果と存じ極め、二月朔日御目見以後、右四人の衆「今夜咄可申候間、私小屋へ御出候様に。」と善右衛門約束致し候。右の宿意はいづれも不存當。二右衛門、六左衛門、源左衛門可參と申合せ候。さて善右衛門は馳走など申付け二階にて書置を認め候。馬渡忠兵衛殿ふと参り懸り候。客來有之様子に相見え、「誰にて候哉。」と名をき、然らば留りて話し可申。」と申され候に付て、「左様に致され候へ、是にちと書き申す物候。」とて、片隅にて書仕廻ひ申し候。夫故書置不埒に有之たる由に候。後御目附石井傳兵衛も參會候を善右衛門いろく申し候て歸り申し候由。これは主水殿へ心安いたし候に付て、傳兵衛難をのがし申す心入なるべしと、後に沙汰有之候由。(此一事は主水殿家の咄なり)二右衛門、六左衛門、九郎左衛門参り、源左衛門は障り候て不參候。終夜の馳走にて夜明がたに何も歸り可申と申し候を、善右衛門申し候は、「粥をにさせ申し候間御控へ候へ。」と申す。「いや粥は望もなし。」と六左衛門、九郎左衛門は起上り居り申し候。二右衛門起直り候處を善右衛門居直り、「覺えたり。」と拔打に首打落し申し候。忠兵衛飛懸り、善右衛門脇差持ち候手をひしととり申し候時、「そなたは構ふ人にて



なし。」とつきはなし候へば、忠兵衛びん口に疵付き、二階より下に落ち絶入り仕り候。さて夫より直に九郎左衛門に切懸り申し候故、抜合せ火花を散し切結ぶ、六左衛門は何とも不心得意趣の覺はなし、双方傍輩なれば何とすべき哉と先づ脇差をぬき、二人が勝負を伺ひ居り候。然る處に善右衛門下人兩人ぬき身もち、階子を上り、六左衛門の脊中を二刀たて割に切付け候、六左衛門ふり返り、上よりたゞみ打に打ち申し候に付、下人どもは上り得ず、下におり候。又二人が勝負をうかゞひ居り候所へ、下人ども下より上り候ゆゑ、又扣き落し、幾度ともなく追下ろし申し候。然る處九郎左衛門打倒れ候。其時六左衛門詞をかけ候は、「善右衛門是はどうか」と申し候へば、「其方ものがさぬ。」と切懸り候。心得たりとて切結び、双方數ヶ所の手負、時を移し候處に、九郎左衛門切伏せられながら、善右衛門が飛廻り候あたりを、寝ながら「口惜い」と云ひて、横に拂ひ、善右衛門が高股打て落し候に付て、則ち打ちまろび候。六左衛門乗懸り、留めをさすべきと仕り候が、ふと存じ付き候は、我に意趣の覺えなし、とゞめをさせば意趣打になる。是は是非なく切りかゝられて、切捨て候ものなるべしと思ひ付き、扱未だ九郎左衛門、善右衛門は息通ひ居り候へば誰ぞへ引合せ置きたし、三人ながら切死し、我一人生きて居て、後日に證據なし。さらば御目附に可申達と存じ候へども、深手を負ひ氣分悪敷候を、齒嚙を爲し大小さし、扱階子を下り候時に、定めて下には下人ども、待懸け居るべしと存じ付き候へども、のがれぬ所

と覺悟を極め、かけ下り候へば、下には一人もなし、是を幸に石井傳兵衛小屋に行き、右の次第申し達し候へば、始終を聞きてから、「我等一人承りては見分も罷り成らず候間同役へ申達せられ候へ。」と申す。此の時の恨限りなく候由。然れども能き様に取合、最早打たす氣分に候へども、唯がばかりにて、福地市郎兵衛小屋に参り候へば、老人打ち笑ひ、「さてく、若い衆は其様にあつてならず、我等参りて見届け可申。」と則ち連立ち出申され候。此の時の嬉しさ終に忘れられず候由。扱市郎兵衛高も、立取り、血の中に踏ぬかり、二人に詞を懸け候へども物云ひ埒なし、「書置を見申され候へども不埒に候故、此分也。」と立出申され候へば、善右衛門は間もなく相果て候。九郎左衛門は疵癒え申し候。右の次第言上に及び、九郎左衛門、六左衛門何の事もなく相濟み候。是偏にとゞめさし不申處、意趣討にて無之證據に相成り候てなり。六左衛門始終の働、偏に運に叶ひたる事共に候。切合ひ候時脇差がよはき様に思はれ、木刀がな一打に打倒してくれん物をと計り存じ候由。右の始終六左衛門直の咄の由。九郎左衛門は疵平癒以後御番を一度相勤め、間もなく餘の病氣にて相果て申し候由なり。扱又右の仕合に付て、親五太夫子無之、小川舍人弟養子仕り盃事の節申し候は、「二右衛門事當の太刀を不討相果て候。武運に盡きたる者にて候、子々孫々に到る迄二右衛門が弔仕るまじく候、斯様の者の跡をとぶらひ候得ば、冥加盡き申す事に候、我等今迄弔不仕候。此の事屹度申し渡し候。」由申し候となり。



武藤善兵衛へ忠兵衛縁組仕り置き候が、縁を切り候由なり。

秀島二右衛門打果の事 二右衛門、高木與右衛門兩人ながら、光茂公御側衆なり。三月廿八日に與右衛門宅へ二右衛門見舞ひ申し候處、出會ひ候へば何か御隙入相見え候由申し候故、「唯今灸治仕かゝり居り候。」と申し候故、「さらば歸り可申。」と申して暇乞いたし申し候。暫くして又參り候に付て出會ひ候時、唯一打に大げさに切殺し候。女房驚き走り出で、與右衛門を抱立て候得ば、二右衛門は庭の方へおり申し候。女房聲を立て、下人共あれ切り留よ、與右衛門殿を切殺したぞ。」と申し候に付て、下人共懸付け候得ば、二右衛門は早自害致し、相果て候。書置には與右衛門と口論致し、我等ひけ取り申すと沙汰御座候に付て打果し候と有之由。終に沙汰なき事なり。亂心と相聞え候。双方跡式潰れ申し候。與右衛門屋敷は後家に下され候。原權兵衛姉なり。右屋敷に付咄あり。

鶴五郎右衛門打果の事 五郎右衛門御能役にて、夜中歸り候節、御城にて刀見え不申由申し候に付、穿鑿仕り候節福岡安右衛門申し候は、「士の刀を失ひ候と申す事有るものか。」と恥しめ申し候。刀は置處違ひ候哉、又餘の人直し候哉、脇より見出し申し候て、歸り申し候。五郎右衛門此の一言を憤り、

翌朝早天安右衛門宅へ仕かけ打果し申し候。子供兩人出會ひ五郎右衛門を打留め申し候。五郎右衛門は部屋住にて候。安右衛門跡式潰れ申し候。子供への仰せ渡に付て咄有之なり。扱又安右衛門姉聲屋敷内に居り申し候が、右切合の節は水波に參り居り、懸合ひ不申事濟み候てより參り候由申し出で候。尤御構ひ無之候。右の者は青木八郎兵衛組の者にて大木左助與内にて候。右の様子左助承り必定逃げ申す爲と相見え候。早朝の事にて候に、懸合ひ不申筈にて無之、與内にスクタレ者置きてはならず、様子を可聞とて、潜に右の者を呼び座敷にて直究仕られ候。此の者申し候は、「此の上は是非もなき事に候、有體は私懸付け見申し候に子供兩人にては中々手に及び不申様子にて候故、棒にて先づ五郎右衛門の刀を打折り、たゞきふせ、子供にきらせ申し候。左様に候へば子供外聞悪しく候故、私は懸合はず、子供計にて仕留め候と、申出で候。」由申し候に付て、潜に褒美仕られ候とも申し候。扱又五郎右衛門下人は、宿許へ歸り候に付て、生害仰せ付けられ候由。

牛島新助雜言申し候事 御禮日に登城の面々、御式臺に集り居り候中にて、何某新助へ申され候は「そなたの屋敷の林は、扱も見事の竹にて候。普請用に所望申し度し。」と申され候。新助申し候は、「其方の女房の様に、拙者が屋敷の竹は商物にては無之。」と申し候由。



牛島新五郎女房の事 新五郎事、綱茂公御懇に召使はれ候處、女房の兄權藤七兵衛、惡所へ参り候事顯然に付て、江戸にて御仕置仰せ付けられ候。綱茂公は、惡事見懲しの爲と思召され、一門端々迄しん敷遠慮仰せ付けられ候。新五郎儀も小舅の惡事に付、早速江戸より差下され、蟄居仕り候事三年にて候。其内に一門同組共より申し候は、「是非共女房に暇を出し候へ。其の時は元々の如く召使はるべき事に候。今四石の身代にて、何をながら申すべきや。」と、度々意見申し候へども、新五郎承引仕らず候。「全く女房にほだされ、暇を出し申さぬにては之なく候。我身よかるべきとて、科かもなき女房に暇くれ申す事は、義理なき事に候。飢死致す覺悟に極め候間、御構ひ有る間敷。」と申され候由。

鍋島左太夫嫁の事 左太夫子、内藏之助内方は小川舍人娘にて候。舍人浪人、綱茂公の思召入有之由にて、御世に成り候てより、左太夫へ、「是非々々嫁を返し申され候様に。」と申す人有之候へ共、「科かもなきを返し申す事は、たとひ如何様に不首尾に候とても、罷成らず候。」と申し切つて居られ候。右嫁程なく死去にて候故、石井縫殿娘縁組にて候。此の節も、舍人近縁の事に候間、しかと無用と申す人多く候へ共、「とかく縁柄の儀に候へば、彼一類より取らねばならぬ。」と申して、又々縁組仕られ候由。

綱吉公御世替りの時一鼎見立て候事 嚴有院様薨御、綱吉公御代になり候事相聞え候に付て、石田一鼎梅の山より岡部見理へ見舞ひ候て、「新將軍は何と可か有と御考へ候哉。」と申され候へば、「そなたは何と思召し候哉。」と申され候に付て、「館林より一人も手元に召使はれず候得ば、良き公方にて可か有之候。是より外當然の考無之候。爰にてよしあしを見可か申。」と申され候へば、見理申され候は、「我等も左様に見申し候故、聞合せに江戸に遣はし候が、未だ返答無之。」と申され候由。

小山平五左衛門高麗にて母衣脱ぎ候事 高麗御陣の中、高き所より、直茂公、下を御覽成され候へば、母衣武者共、皆母衣を脱ぎ寛ぎ居り申し候。公以ての外御立腹、「陣中にて、物を脱ぐ事不覺悟なり。何某参つて、母衣を一番に脱ぎ始め候者を、承つて参るべし。其の分申付くべし。」と仰せられ候。御使参り、右の如く申し候へば、何れも驚き、「何と申上ぐべき哉。」と申し候時、小山平五左衛門申し候は、「廿人の母衣武者共、目と目をきつと見合はせ、一度に母衣をはらりと取り申し候。」と申す。御使歸りて申上げ候へば、直茂公、「にくい者共かな。夫は小山平五左衛門が可か申。」と仰せられ候由。小山は龍造寺右馬太夫殿の子、武勇の人なり。



福地吉左衛門鶴御料理の時御請の事 勝茂公御客御振舞、鶴の御料理御座候に、御客人仰せられ候は、「御亭主様は白鶴、黒鶴など上り分けらるゝと承り候、其の通りに候哉。」と御申し候に付、「成程たべ分け申し候。」と仰せられ候。「さらば唯今の御料理は何と上り候哉。」と御申し候に付、「眞鶴にて候。」と仰せられ候。御客方、「いかにしても不審に御座候。御膳方の衆御出し候へ。可承。」と候に付、「福地吉左衛門参り候様に。」と仰せ出され候。此の事吉左衛門物蔭より承り候て、御臺所へ参り、大盃にて數盃續け酒を呑み居り候處、召させらるゝと度々申し來り候へども罷出ず、暫くして御座に出で候へば、御客方御尋ねなされ候。吉左衛門不舌になり、「白黒鶴、いや眞鶴、黒鶴。」などと埒もなく申し候に付て、公御呵り成され、「たべ酔うたるさうな、引取り候へ。」と仰せられ候由。兼て勝茂公の御意に、「人は四段ありと思ふなり。急々、急だらり、だらり急、だらりくゝなり。急々はなきものなり。福地吉左衛門などが急々に似たる者なり。だらり急も少なし、中野數馬共なり。急だらりは多し。大方だらりくゝ計り。」と仰せられ候由。

去方にて筈盜改の事 去方へ振舞有之候節、筈矢ひ候人有之候へども、其分にて歸られ候。その様子見取り候もの有之客入歸り候後、主人へ申し達し候に付て、先づ表門裏門所々の外口鎖おろし詰

中上下残らず寄せ、「身上滅亡今夜限に候。客人を招きて道具を失はせ、明日より人に面を合せらるるものか、今僉議をして我こそ取り申し候とは申す間敷候。此の上下數人の下に取りたる者有るには極りたり、就ては是非なき事ながら片端より手打をし、明日より我等は引入る覺悟に極めたり。科なき者を數人殺し候事不憚なり、夫にても斯様にせねば一分立たざる所なり。いづれ死ぬ命なれば、是にて涼しく云ひて人を助くるにては有るまじきか。」と申し聞けられ候時、「私盗み申し候。」と申し出る。則ち下屋敷にて生害とも申す、又手打とも申し候由。或る人の咄なり。手はしかき働、今時珍敷事なり。謙信などの風儀とも可申哉。

岩村内藏助末期の事 内藏助は三極流の軍術を傳へ、正三の佛法をも直授せられたる由に候。病氣も無し之庭を廻られ候へば、氣色悪く成り候故、座に入り打臥し申され候に付て、内方驚きいだき起され候へば、眼をクワツと見開き齒齧をなし、正三風の發起を出し、其の儘臨終の由なり。正三弟子に是ほどに修したる人も有るべからず。一大事の所なり。

内藏之助は、姉川村庄屋の子にて候。勝茂公御鷹の時分、御供の衆見立て申され、忠直公の御小姓物書召出され候。御死去の後勝茂公より、光茂公へ相付けられ候三人の内なり。岩村、百武、生野なり。



上野利兵衛下人の事 利兵衛江戸雜務目附にて居り候時分、手男に年若き者心安く使ひ申し候が、八朔の前夜御歩行目附橋本太右衛門と酒をたべ、性根もなく酔ひ、右の手男を連れ、小屋へ歸り候が、道にねだり言をいひ、小屋の前にて、手男を切り可申と仕り候を、手男小尻返しをして利兵衛と組合ひ、下水に利兵衛落ち入り、手男は上よりおさへ居り申し候。其の時利兵衛下人駈付け、上が利兵衛様か、下が利兵衛様か。と申し候時、「下が利兵衛ぞ。」と申し候に付て、手男を一刀切り申し候。手男は其の儘起き上り、薄手故逃げ申し候。此の事御究めになり、利兵衛は苗木山の籠屋に入れ、後に縛首にて生害仰せ付けられ候。利兵衛事、この前江戸相詰め候時分、町方借屋にて下人手向ひ候を打捨て候。その仕廻能く候處、此度の仕廻言語同斷なり。力ぬけ候様に酒を呑むは、すぐたれの基なり。右下人は多久の者にて候。太右衛門は究め半に自害仕り候なり。

志田吉之助一期を積り申し候事 吉之助申し候は、先づ息の切る、程走る時は、せつなきものなり。走りつきて立つてゐる時、殊の外心よく、夫より下に居れば又よし。夫より横になれば又よし。夫より枕をして篤と寝れば又よし。人の一代も如し是なるべし。若き時、随分苦勞をして段々と心安く仕成し、老後死際には寝て居る様に有り度きなり。初めに寝ては後骨折るなり。後迄骨折り、一生苦勞に

て終るも残念となり。此の事、下村六郎右衛門咄なり。

吉之助咄に、「人は低く成るほどよし。」と申し候事、此の咄に似申し候なり。

神代三左衛門御意見申上げ候事 右兵衛様御年若の時分は物毎手荒く御座成され候。御側に御氣に入らざるもの居り申し候に、その者の女房の事を様々悪口を扇に御書き成され、餘の者に仰せ付けられ、「これを見せ、彼者が仕様を聞かせよ。」と仰せ付けられ候。彼の者に見せ候へば、誰が仕たるも存ぜず、扇を引さき申し候。此の事をまつすぐに申上げ候へば、「主人の書きたる者を引さき、無作法者、切腹。」と仰せ出され候。其の時三左衛門罷出で、色々御意見申上げ候へども、曾て御納得遊ばさるべき様子に無之候。三左衛門申上げ候は、「こればかりにて候はゞ、仰せにも従ひ可申候へ共、御心御直り遊ばされず候はゞ、以後まで斯くの如き事、絶え申す間敷候。最早能き頃迄生き申し候間、唯今御手打に逢ひ可申候。ながらへ候て斯様の事ばかり見聞き候ては、生きたる甲斐も御座なく候。私を御手打成され候はゞ、少しは思召し直さるゝ事も御座あるべく候。平に御手打。」と、はひかゝり涙を流し申上げ候に付て、ひしと御行詰り成され「扱々尤も至極の事、汝が志にて我が心忽ち直りたり。則ち助けよ、以後にも死罪は申し付く間敷。」と御意成され候。「しかと左様に思召し直され候



哉。」と御詞をかため、引取り申し候由。此の後、御慈悲心御出来成され候由。

原田四郎左衛門蟒蛇斬り候事 武雄家中原田氏十五歳の時、鷹をすゑ、野原を通り候處、蟒蛇鷹に目懸け候哉、尾の方を打ちかけ、肋の邊を三巻まき申し候。鷹は据ゑながら脇差を抜き、振上げて頭の方の寄り候を待懸け居り候處、首近寄り候を宙に打つて落し候へば、身に卷付き居り候も、はらりと落ち申し候。蛇の長さ三間程有之たる由。其の後肋痛み候を、久しく養生仕り候が、今にも寒中に痛み出し申し候由。直の咄承り候由、武雄氏咄なり。

又武雄にて獵に参り候人、何とも知れざる物、口を開け仕かゝり候に付て、獵脇差一尺二三寸候を抜き、飛びかゝり口の中に突込み候へば、肘のあたり迄突込み申し候て、忽ち仕留め申し候。長さ一間半ばかりの蛇にて候。面は獅子狛の様に候、胴四尺計りは猫の胴の様に候。鱗、錢の様に腮より腹にかけて白毛生えさがり、鼠の足の様なる足八つ有之、尾の方に成るほど細く候由。鹽漬にて佐嘉へ参り候由。其の後右の草山震動致し、暫く通路絶え申し候由。又蛇追懸け参り候時、横に早くひらき候へば、直に行きぬけ申すものに候。身半分は立て参るものに候。立ちたる所を打ち候へば、折れ申し候。首みじかく切り候へば、失申す事有之候。随分下より切り候へば、二三間先へ参り留り

申し候。面にて人を突き申し候が、裏表に通り申すものにて候由。又ひらくちは刃物にて切り候て、頭失せ候へば、多分仇をなし申すものにて候由。

中野内匠家來相田吉左衛門辻切仕留め候事 夜中、神埼長者林を通り候處、向より大の男立向ひ、通し申さず候に付て、斷り申し候へば、「裸になりて通らば通すべし。」と云ひて、兩腕をひしと取り候に付て、少しも働き成らず。相田きつと案じ付き、「随分はだかに成り申すべし。命計りは御助け候へ。」と申し候故、免し申し候。則ち丸裸になり、大小衣裳相渡し、すごとくと立別れさまに、後ろよりかたげたる刀の柄に手をかけ抜き取り、大げさに打つて落し、神埼に参り様子を申し達し候。然る處、紀州様御城へ御出で、「私は足を一方打折り申し候。」と仰せられ候。勝茂公様子御尋ね候へば、「秘藏の駕籠昇平人の六七人前ほど働き申す大量の者に候を、中野内匠家來より切殺され候。相手早々切腹仰せ付けられ下され候様に。」と仰せ上げられ候故、早速切腹仰せ付けられ候。残念の仕合せなり。死場へ中野一門衆見舞に候處、「忝き事共に候。御禮に兼てすき申し候仕舞仕り、御目にかくべく。」と、子どもを寄せ、拍子致させ、其の身仕舞仕り、頓て首を打たせ申し候。介錯は甥相田權兵衛仕り候なり。



川中山郷村金所山石山泉杉山沼  
 添鳥村 上築 田村内 谷田波  
 文悦 白靜新金三貞素斜代美瓊  
 子次魏巖人藏藏子吉行汀水妙音

いてふ本校訂者

昭和十二年九月九日印刷  
 昭和十二年九月十三日發行

いてふ本  
 葉 隱 中

定價  
 金六拾錢

不許  
 複製

編輯者

三教書院編輯部  
 代表者 鈴木初雄

發行者

東京市中野區高根町六番地  
 鈴木初雄

印刷所

東京市本所區東駒形三丁目十番地  
 文化印刷株式會社  
 代表者 西野末雄

發行所

東京市神田區錦町一丁目十五番地  
 三教書院

電話神田二四〇八番  
 振替東京四五八〇番



いてふ本刊行の辭

現つての漸く自國の諸外來思想偏重の移對  
 として新に注目し始めては、  
 吾は出版界に於ては、  
 如何なる非多きか、  
 如も高なる者、  
 等々の多し、  
 大の共、  
 當の職、  
 當今、  
 幀の格、  
 一と、  
 ると、  
 一、  
 ず、  
 を、  
 と、  
 大、  
 方、  
 の、  
 支、  
 持、  
 を、  
 期、  
 待、  
 し、  
 て、  
 已、  
 ま、  
 な、  
 い、  
 所、  
 は、  
 以、  
 る、

昭和十年五月 三教書院主

昭和十二年八月二十日  
改正定価金六十圓

いてふ本既刊目録 (昭和十二年九月現在) ★最新刊

古事記全	平安朝日記集全	★講孟劄記全
日本書紀上	平安朝物語集全	★中朝事實全
日本書紀中	源氏物語(桐葉)一	★葉隱上・中・下
★日本書紀下	源氏物語(須磨)二	武經七書全
愚管抄全	★源氏物語(玉鬘)三	武將感狀記全
神皇正統記全	近松心中物全	白隱法語集全
萬葉集上	西鶴物全	駿臺雜話全
萬葉集下	俳諧七部集全	益軒養生訓全
枕草子全	燕村七部集全	日蓮大士眞實傳全
古今和歌集全	奥の細道全	東海道中膝栗毛上
山家集全	風俗文選全	東海道中膝栗毛下
平家物語上	雨月物語全	★浮世風呂呂全
平家物語中	日本外史上	新編水滸傳一—五(上帙)
平家物語下	日本外史中	新編水滸傳一—五(下帙)
保元・平治物語全	日本外史下	修紫田舎源氏全四册
曾我物語上	文章軌範全	いろは文庫上・下
曾我物語下	唐詩選全	やまと文庫一・二
義經草全	★三體詩全	
徒然草全	★請獻遺言全	



67  
529



終